

アジア神学セミナー 秋7回
現代社会とキリスト教1 身体性の回復

担当者：植木献
11月19日(月)

はじめに

- 1.現代神学は身体を課題とする
- 2.アジア宗教は身体を媒介とした真理追究を行う
- 3.福音は身体を除外しない
- 4.アジア神学は身体を課題とすることで神学を再構築する
おわりに

はじめに

アジアとは何か？ 地理的概念としても確定したものではない
古代ギリシア、ローマから見た「東方」→拡大へ アジアとしての共通基盤はないのか？

わたしは改めてアジア地図と世界地図を見直して(正直にいうと何度も何度も見直して!)、歴史的、宗教的、文化のおよび哲学的に見て「アジア」と呼ばれる、きちっとまとまった、統一的実在なるものは存在しないと確信した。全人類世界から分離された「アジア」ではなく、それと網の目のように密接に結ばれたイメージゆえに、わたしは「アジア的神学」よりも「アジアにおける神学」というフレーズを選んだのである。「水牛神学」は、端的に言えば、タイ北部と深い関わりを持つ神学、いわば「地域における神学」である。ラジャー・マニカムの勧めに従って言えば、地域に根を下ろすと同時にエキュメニカルな視座を失わぬ神学である¹。

現代神学とは何か？ 第一次大戦以降の神学的言説
特定の課題を論じる神学 共通基盤の希薄化
アジェンダの提示→ジャーナリズムとの親和性

1.現代神学は身体を課題とする

所与の身体的制約が課題に 同時にその経験から聖書を読む
解放の神学、フェミニスト神学、民衆神学、黒人神学、LGBT神学

西洋の神学、日本の神学は、極端に表現すれば、生から神学が生まれるのではなく、神学から神学が生まれるようですね。論理から論理へとつながり、方法的には演繹法になりますね。具体的な生の経験と現実から、事件[出来事]から帰納的に神学するのではないということでしょう。…いつも、生の現場、歴史の現場、事件の現場から質問を得、この質問を聖書に投げかける、しかし聖書から答えが返ってくる時にも、常に現場

¹ 小山晃祐『水牛神学 アジアの文化のなかで福音の真理を問う』教文館、2011年、8頁

によって聖書が再照明され答えがもたらされるという方式でその答えが導き出される。そうなんです。それ以外に別に何もありません²。

神への信仰はパンへの飢えの根絶を導かなければならない。神への飢えへの然り、パンへの飢えへの否、これは類のない力強さで次の結論を言い表す。この両者は両立できない。なぜならイエスの神は、いのちの神、あらゆるいのちの神だからだ。貧しい信仰者たちの経験はこのことを明確に認識している。なぜなら、この人々の経験は、キリスト者であれば拒絶しなければならない対立、虐待、不正義の状況のただ中にいる者の経験だからである。…貧しく抑圧された人々の信仰の経験は、聖書の掲示する神について考察しようとする本書の生きたコンテクストであり、歴史的、社会的な場である³。

それゆえに私は、聖書を次のように理解することを提案してきた。すなわち無時間的なアーキタイプ(理念的原型)ではなく女性の教会のプロトタイプ(起源的原型)を構築するものとして、そして、経験を始動させて変革を構築する開かれた範例として、理解することである。…聖書を女性の教会の形成的根源モデルと捉えるこの概念は、父権制的抑圧のモデルや伝統と、解放的な生活実践のモデルや伝統という両面を探究することを可能にする。この概念は、聖書全体を規範的な永遠不変のアーキタイプとしてではなく、「人間(メン)の言葉」で書かれているが「神を表現する」ことが出来るという経験的権威として回復することを可能にする。この概念は聖書を、何かを可能にする力の源として、石ではなくパンとして回復すること、そしてまた父権制的宗教の歴史遺産としてだけではなく、平等な弟子集団としての女性の教会の歴史遺産としても、回復することを可能にする。聖書を歴史のプロトタイプとして認識することは、歴史は前進しているという意識と、キリスト者としてのアイデンティティという意識とを、女性の教会に提供する⁴。

2. アジア宗教は身体を媒介とした真理追究を行う

湯浅泰雄『身体論 東洋的心身論と現代』講談社学術文庫

「修行」という宗教的実践におけるアジアの共通性

座禅、気功、ヨーガなど、日本の歌道、能楽、茶道などの「稽古」

一つの重要な特質は、東洋の理論の哲学的基礎には「修行」の考え方がおかれているところにある。簡単に言えば、真の哲学的知というものは、単なる理論的思考によって得られるものではなく、「体得」あるいは「体認」によってのみ、認識できるものであるというところにある。それは、自己の心身のすべてを用いてはじめて得られる知である。それはいわば「身体で覚えこむ」ものであって、知性によって知るわけではない。修行とは、心身のすべてを打ちこんではじめて真の知に到達するための実践なのである⁵。

達人宗教(ウェーバー)：達成としての心身一如 哲学と瞑想が結びつく必然性「真理についての知は、単なる知識をこえた心理的生理的気づきなのである」⁶ →腑に落ちる/落ちない

「瞑想」：生理的なものと知的(心的)なものを統合する伝統的な東洋の技術として検討

² 安柄茂『民衆神学を語る』新教出版社、1992年、37-38頁

³ グティエレス『いのちの神』、13-14頁

⁴ フィオレンツァ『石ではなくパンを』新教出版社、1992年、20頁

⁵ 湯浅、21頁

⁶ トマス・P・カスリス「解説」『身体論』、359頁

瞑想の伝統の多くは呼吸に心を集めてコントロールすることから始まる。呼吸は意志によってコントロールできる生理的機能であり、また自律神経系に作用することができる⁷。→内的統合

宗教的信念は宗教的訓練を通じて形づくられる(371頁)→単なる信念や知識ではなく、身体による実践が先立つか少なくとも伴う

湯浅の場合、宗教性というものは、本能的なりビドの力の昇華によるものでなく、宗教的伝統によって定められた形式や姿勢を訓練し、身につけることを通して達成される創造的な表現である。言い換えれば、宗教的信念の背景をなしている確信とは、適切な宗教的形式を演ずることによって獲得される生理的・心理的達成なのである⁸。

→芸術的感受性との類似性=人によって心身統合の度合いが異なる

cf「食べること」：意志によってコントロールできると同時に別の自律神経系である腸神経に作用できる。さらに腸は共生するマイクロバイオームとの複雑なやりとりにも対応するため、外部との関わり合いのコントロールにもなる。外部とのよりよい統合→共生⁹(commensalism、commensality)→健康

道元が座禅と同様、調理や食事を修行として重視した点¹⁰は興味深い

東方教会の修道制にある祈りの心身技法(座位前傾姿勢、呼吸の制御、心臓への意識集中、「イエスの祈り」の復唱)¹¹→東方教会もアジア

アジアとは身体に関心を寄せる場であるだけでなく、身体を媒介とした真理追究の方法であり、この共通基盤に福音宣教は向き合う必要がある

明治後期から大正期の修養ブーム、木下尚江の岡田式静坐法への傾倒

3.福音は身体を除外しない

聖書：本来は黙読するものではなく、聴くもの、朗唱するもの→自ら、また共同体の身体を媒介とした福音

⁷ 同、370頁

⁸ 同、372頁

⁹ D・モントゴメリー、A・ピクレー『土と内臓』築地書房、2016年。マイケル・D・ガーシオン『セカンドブレイン 腸にも脳がある!』小学館、2000年

¹⁰ 道元『典座教訓・赴粥飯法』講談社学術文庫

¹¹ 久松英二『祈りの心身技法 十四世紀ビザンツのアトス静寂主義』京都大学出版会、2009年

聖書の読み方を課題とするアジア神学

安柄茂によるヨハネ福音書の読み方

ヨハネの抵抗：物となった神→受肉を最も生々しく伝える

ヨハネは肉(サルクス)というギリシア時代から最も卑しく汚れたものとして軽蔑された言葉を使い福音を説明。

「イエスは命のパン」→5000人給食の話を前に置く

「イエスは生命の水」→サマリアの女性に水を求める実際の話と連結

「イエスは光」→目の見えない人の目を開いた事件を置く

「イエスは生命」→死んだラザロを生き返らせる話と結びつける

「イエスが私の肉を食べというとき、観念的・抽象的に語るのではなく、実際に飢えた群衆を食べさせたのちに、そのように私の肉を食べろ!ということによって『インカーネーション』の意味を誰よりも強く際立たせたのがヨハネです。要するに、言葉が肉となったということは、神が物となった、つまり神を地上に、物の世界に引き下ろすことです。」¹²

→ヨハネは観念化、非歴史化、抽象化に抵抗し、実現された終末、神の現在性を強調する

宗教儀式に変質したユーカリストに抵抗するため、ヨハネは最後の晩餐を記事にせず、5000人給食に繋げた「命のパン」「これをとって食べ」という記事を置いた。その意図はユーカリストの本質が「分かち合い」あり、キリスト論的救いにある訳ではないから。

「分かち合い」→神の国は「公を公に戻すこと」「私有化しないこと」¹³

「私たちはいまでも、もの、すなわち食べることと飲むこと、そしてそれを生産する実体である労働する肉体の重要性を神学的に明らかにすべきです。食べることを軽視するものは飽食者のみです。物(食べること)の重要性を認めなければ、聖書の中心は発見できないはずです。」¹⁴

聖霊について：旧約のルーアツハ、ネフェシュは「インディビディウムとしての人格」といった観念ではなく、その延長上にあるパウロの Pneuma も「ある具体的な力の実現」を意味する。「東洋の概念でいえば『霊』よりはむしろ『気』が正しいのです。」¹⁵

西洋的カテゴリーに固定された三位一体や聖霊理解を批判し、ダイナミックな出来事としての側面を強調

¹² 安柄茂、281頁

¹³ 同、283頁

¹⁴ 同、363頁

¹⁵ 同、250頁

小山による聖書的身体観とアジア的身体観の親和性の発見

「神学は心情(心情は全感情の座であるばかりではない、理性と意志の座でもある)に関わるばかりではない。腎臓をはじめとするはらわた(『魂のもっとも秘やかな情動ははらわたの内部にあると考えられていた』詩篇73編21節、エレミヤ書17章10節)にもかかわらなければならない。今日、普遍的教会は、われらの内なる『アジアのはらわた』がとりわけ十字架の言葉のメッセージにどのように反応するかを確認しようとしてわれわれを見守っている。」¹⁶

「アジアの神学は固有の個性を持っている。すなわちそれはアジア的心情と『はらわた』に『イエスのしるし』(ガラテヤ書6章17節)を帯びているはずである。われわれの『心情』と『はらわた』の深みにこめられているものは、神学即宣教学の土台である十字架の言葉への服従のうちに表現されなければならない。」¹⁷

アジア神学の課題の所在を、アジア人の心身の統一の場である「はらわた」において福音を受け止められるかを見出す。

4. アジア神学は身体を課題とすることで神学を再構築する

からだの復活・主の食卓から見た教会形成と宣教の可能性
食べること：心身の統合と外部・他者との共生の両方に関わる

アジアにおける食の視点

身体のを必要を気遣うアジア的挨拶：ご飯食べた？→日本になぜこの挨拶がないのか？

你吃饭了吗(ニー チー ファン ラ マ：中国語)

밥 먹었어요(パプ モゴッソヨ：韓国語)

Ăn cơm chưa?(アン コム チュア：ベトナム語)

sudah makan ?(スダ マカン：インドネシア語)

กินข้าว หรือยัง(ギン カー オ ルー ヤン：タイ語)

Kumain ka na?(クマイン カ ナ：タガログ語)

^{パプ ハヌル}
「飯が神」¹⁸

飯が天なのです。

天をひとりで持てぬように、

飯は互いに分け合って食べるもの、

飯が天なのです。

天が星を共に見るように、

飯はみんなで共に食べるもの。

飯が口に入るとき、

¹⁶ 小山晃祐、228頁

¹⁷ 同、230頁

¹⁸ ^{ソナムドン}徐南同『民衆神学の探究』新教出版社、1989年、146頁

天を体内に祭ること、

飯が天なのです。

オー、飯は、

みんなで互いに分け合って食べるもの

(金芝河の詩 同、147-8頁)

「食膳共同体」¹⁹

みずからをキリストの体であると意識した初期キリスト者たちは、色々の枝分かれがあるとしても、有機的な体になるための最も基本的なことが何かを知っていました。多分みずからそうだったというのが正しいでしょう。それは互いに分かち合って食べることでした。

「食口(シック)」

韓国人は有機的な共同体はともに飯を食うことと、不可分の関係にあると考えています。…日用の糧に喘いでいる者たちの食膳共同体から与えられる喜びと平安は、満腹の者たちには絶対理解できません。イエスの行動において、民衆とともに飲み食いしたという事実が大きな比重を占めています。死を目の前にしてもそうでした。そして、神の国で再会する場をともに食べる座にたとえたイエスの言葉の意味は、多分飢えたことのない人々には永遠に分らないでしょう。ですから、家族を食口(シック)と呼んでいた韓国の人々こそ、イエスを最もよく理解する民ではないかと思うくらいです。²⁰

おわりに

アジア神学が成立するには、心身を用いた真理追究の方法(修行)からの問いと、聖書の福音が語る心身理解と救いについての応答の両方を聴く必要がある。

¹⁹ アンギョク、359頁

²⁰ 同、361-2頁